

清河八郎 縁に交流深め

幕末の志士、清河八郎の出身地である庄内町清川の住民らが20日、八郎が旅で通った場所に標柱を立てた村山市袖崎地区を訪れた。八郎について語り合い、歴史を通じた地域間交流を育てていくことにした。

村山市を訪れたのは、清河八郎顕彰会の関係者ら庄内町の8人と、東京のNPO法人「元気・まちネット」の矢口正武代表（戸沢村出身）。袖崎まちづくり協議会歴史部会の平山繁部会長らの案内で、同市土生田に立つ「回天封事の志士 清河八郎お休み茶屋」の標柱を視察した。

1855（安政2）年、約半年間にわたり諸国を旅した八郎は、江戸

出身地の清川(庄内)住民ら 旅で休んだ袖崎(山形)訪問

から清川に帰る途中、この近辺を通った。八郎の旅日記「西遊草」には、茶屋でしばらく休み、たき火で体を暖めた様子などが記されている。

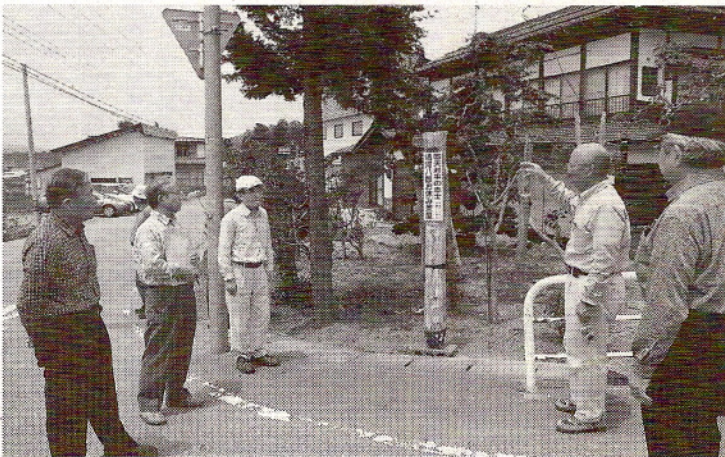
標柱は歴史部会が2009年に設置。同部会は土生田の別の場所に「イザベラバード・清河八郎 鳥海山眺望の地」の標柱も立てた。

この後、一行は袖崎地区市民センターで意見交換。歴史部会の7人を含め約20人が参加した。清河八郎顕彰会の正木尚文副会長は

「八郎生誕180年の昨年から記念事業を展開しており、今後、妻お蓮を描いた演劇の上演、資料発刊、式典などを計画している」と報告した。

「標柱の記事が新聞に出るまで袖崎との関係は知らなかった。まずは行ってみよう、となった」

「清川や東京で開いた八郎のシンポジウムに袖崎の人が参加してくれたお礼を兼ねて訪ねた」と清川の関係者。袖崎側からは「八郎が茶屋で休んでから、いわば156年ぶりの交流。大事に育てたい」との声が聞かれた。矢口代表は「歴史、文化などの地域資源を生かして広域的に連携し、地方を活性化してほしい」と話した。



標柱の説明を受ける庄内町の関係者。清河八郎が休んだ茶屋の場所を示している =村山市土生田